研究紀要Ｒ２－５

教科等横断的な学びに関する一研究（２年次）

島根県教育センター浜田教育センター
研究・研修スタッフ　　共同研究

目　次

【要旨】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
１．研究の背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
２．研究の目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
３．研究の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
４．研究の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
（１）教科等横断的な学びの実現に向けた具体的方策「パッケージ」の検討 ・・・・・ 2
①「教科等横断的な学び」のポイントと課題（昨年度の研究から） ・・・・・・・ 2
②パッケージ作成に向けた方針（今年度の研究から） ・・・・・・・・・・・・・・・ 4
③使用者の想定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
④使用場面の想定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
⑤パッケージの構成の構想 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
（２）教科等横断的な学びの実現に向けたリーフレットの作成 ・・・・・・・・・・・・・ 8
①ガイドの役割としてのリーフレットの構成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
②「教科等横断的な学び」の手順等について ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
③ステージについて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
④ステップについて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
（３）リーフレットの改善点と想定される使用場面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
５．本研究による成果と今後の方向性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
（１）本研究の成果～研究のプロセスで見えてきたこと ・・・・・・・・・・・・・・・ 16
（２）今後の方向性～「教科等横断的な学び」パッケージの活用の提案 ・・・・・・・ 17
６．今後の課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
（１）取り上げなかった校種について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
（２）ふるさと教育について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
（３）ＩＣＴの活用について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
７．おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
＜本研究作成資料＞ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
【引用文献】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
【参考文献】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

教科等横断的な学びに関する一研究（２年次）

島根県教育センター浜田教育センター　研究・研修スタッフ　共同研究

【　要　旨　】

本研究は、令和元年度から２カ年計画の研究であり、新学習指導要領に示された各学校における「教科等横断的な視点」での教育の内容等の組み立てとして、「教科等横断的な学び」の実現に向けた具体的方策の提案を目的としている。１年次では、国等の動向や先進校、先行研究、実態調査で得た情報を「カリキュラムづくり」と「授業づくり」の２つの視点で整理した。２年次では、「教科等横断的な学び」を支えるための具体的な方策として、「教科等横断的な学びのためのパッケージ」を構想した。また、その「パッケージ」に導く「教科等横断的な学びの実現に向けたリーフレット」を作成し、活用方法について提案する。

【キーワード：カリキュラム・マネジメント 教科等横断的な視点 育成を目指す資質・能力】

１．研究の背景

平成29年3月告示『小学校学習指導要領』*1（以下『学習指導要領』という）第１章第１の４において、カリキュラム・マネジメントは、「各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム･マネジメント」という。）に努めるものとする。」という３つの側面を盛り込む形で示されている。その一側面に大きく関わるのが、「教科等横断的な視点」である。

また、『学習指導要領』第1章第２の２においても、「言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる」そして「豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる」という両面での資質・能力の育成に必要な視点であると示されている。これらの汎用的な資質・能力は、一教科の一単元や一時間の授業のみで育成できるはずがなく、「教科等横断的な視点」に立った計画的・継続的な取組が必要となる。

一方で、「教科等横断的な視点での教育の内容等の組み立て」については、カリキュラム・マネジメントに係る研修の参加者からも「カリキュラム・マネジメントについて学校全体でどう取り組

*1 中学校学習指導要領（平成29年3月告示）、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（平成29年4月告示）、高等学校学習指導要領（平成30年3月告示）、特別支援学校高等学部学習指導要領（平成31年2月告示）でも、同様の趣旨が述べられている。

むかは実践例もあってイメージしやすかったが、教科等横断的な視点については何をどうしたらいいかが分かりにくい。」という声があり、ここからは、具体的な教育課程や授業へ落とし込むことの難しさを感じる教員がいることが推察された。

学校現場で児童生徒の資質・能力を育成する教員が、この「教科等横断的な視点」の重要性を理解し、それぞれの学びをどうデザインしていくのか。本研究の１年次では、先行研究や先進校の実践から「教科等横断的な学び」[*2]の実際についての情報を収集・調査し、実態や課題を整理した。２年次である今年度は、１年次の研究をもとに、本県の教育の推進と「教科等横断的な学び」を支えるための具体的な方策を探り、課題を解決するための提供資料を提案する。

２．研究の目的

本研究は、先進校の実践等をもとに、各学校における「教科等横断的な学び」の実現に向けた具体的方策を提案することを目的とする。

３．研究の方法

（１）１年次の研究をもとに「教科等横断的な学び」の実現に向けた具体的方策を盛り込んだ提供資料を「パッケージ」としてまとめ、その内容を検討する。

（２）「教科等横断的な学び」の実現に向けた「パッケージ」に導く「教科等横断的な学びの実現に向けたリーフレット」を作成し、県内の小中学校教員からの意見をもとに改善する。

（３）１年次の研究をもとに「教科等横断的な学び」の実現に向けた「リーフレット」の活用方法について提案する。

４．研究の内容

（１）教科等横断的な学びの実現に向けた具体的方策「パッケージ」の検討

①「教科等横断的な学び」のポイントと課題（昨年度の研究から）

本研究のテーマにある「教科等横断的な学び」については、『学習指導要領』に具体的な記載のない言葉である。また、その学びを実現するために必要な見方である「教科等横断的な視点」については、『学習指導要領』に記載はあるが、具体的な定義付けはされていない。

そこで、昨年度の研究では「教科等横断的な視点」を「教科や領域の枠にとらわれず、それらをつなげていく見方」と捉えた。これは、カリキュラム・マネジメントの研究者である田村知子（大阪教育大学教授）が、著書（田村知子・村川雅弘・吉冨芳正・西岡加名恵『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい、2016年）において述べている「一教科に限定されない汎用的な資質・能力を様々な教科・領域で育成する視点」という捉えと同義であると考えられる。

そして、この視点を基に、県外の先進校の視察や県内教員に対する意識調査と県内先進校の実践の調査を通して研究を進める中で、次のことが確認できた。それは、「教科等横断的な学び」

[*2]「教科等横断的な学び」という言葉は、学習指導要領には具体的な記載がない言葉である。本研究では、児童生徒の学びを「教科等横断的な学びでの授業の在り方」と「教科等横断的な視点による教育課程編成等の学校のカリキュラムの在り方」の両面から迫るべく、この両面を包括する言葉とし、このように定義付けた。

としての授業の在り方を、授業者個人が考え、実践していくことは可能である。しかし、その学びの効果をより高め、汎用的な資質・能力として様々な教科・領域で育成するためには、教育課程の具体的な編成やそのための体制作り等、カリキュラムの在り方について学校全体で考えていくことが不可欠である、という点である。

そこで、各学校の様々な取組とその効果の関連を把握し、整理するために、本研究では「授業づくり（教科等横断的な学びとしての授業の在り方）」と、その背景にある「カリキュラムづくり（教科等横断的な視点による教育課程の編成等の学校のカリキュラムの在り方）」の両面から、その「学び」について迫っていくこととした。

視察や調査を通して、「教科等横断的な学び」の実現のための３つのキーワードが浮かび上がった。それは、①「明確化」（育成する資質・能力や目指す児童生徒の姿を明確にする等）、②「共有」（年間指導計画や単元配列表等の職員全体での活用や共通理解等）、③「つなげる」（各教科等の内容や獲得する資質・能力の関連付け等）である。例えば、県外先進校と県内学校それぞれの「教科等横断的な学び」のポイントとして昨年度研究で挙げられたものは、次のようにキーワードとつながることが分かる。

＜県外先進校視察より得られたポイント＞

〈カリキュラムづくり〉

○学校として「教科等横断的な視点」で育成を目指す資質・能力を明確にすること（①明確化）

○グランドデザイン、学習計画表、単元配列の作成を通して、内容や資質・能力の関連を把握すること（①明確化・②共有）

〈授業づくり〉

○各教科等で育成を目指す資質・能力を、他の教科等で獲得した資質・能力と関連づけ、単元（題材）や授業のデザインをつくること（③つなげる）

＜県内先進校調査より得られたポイント＞

〈カリキュラムづくり〉

○育成を目指す児童生徒の姿を具体的にして、教職員で共有すること（①明確化・②共有）

○年間指導計画や単元配列表において、教科等の内容や育成を目指す資質・能力のつながりを明確にすること（②共有・①明確化）

〈授業づくり〉

○教科横断的な視点で授業をつくることができ、その視点で児童生徒の姿を見とることができること（③つなげる）

※以上は、ポイントとしてまとめたものの一部であり、複数のキーワードを含んだり、区別できないものも存在したりしている。

これらは、視察と聞き取りによる調査という違いはあるが、その内容に大きな違いは無いように思われる。共通している部分も多いことから考えると、学校規模や教員の構成の違いに関係なく、ここに挙げられたポイントを具体的な取組として行っていくことで、各校の「教科等横断的な学び」の充実に繋がると考えられる。

実際、県外先進校の児童生徒では、「各教科で連携して伝統文化教育に力を入れた授業を行い、生徒も伝統文化への関心が高まり、目の前の課題に対して教科の枠を越えて考えることができていた姿があった。（金沢大学附属中学校視察より）」、また、「文化的な違いや環境問題に及ぶ意見も見られ、各教科等で獲得した知識や経験が統合され、各教科等の見方・考え方を自在に働かせながら対応策を考えていた。（広島大学教育学部附属三原学校園視察より）」というように、「教科等横断的な学び」を通した教科の枠に留まらない見方・考え方ができる姿が表出されている。

ただし、県外先進校は全て大学の附属校であり、その取組の具体の中には、通常の学校では行えないような新領域をカリキュラムに組み込んだり、全国の教員が参加するような大規模な研究大会を継続的に行うことで研究に対するフィードバックが得られたりするなど、そのまま県内の各校が実践できないものもあった。「教科等横断的な視点」でカリキュラム・マネジメントを推進するとともに、継続的かつ計画的な研究のもと、「カリキュラムづくり」と「授業づくり」を強く連関させることが、「教科等横断的な学び」を実現できる学校の体制につながることは明らかである。

附属校ではない県内の学校による取組はどうだろう。調査からは、「児童は繰り返し学習することで情報活用スキルを身に付けることができた。また、情報収集の仕方を身に付けるにつれ、調べ学習に意欲的に取り組む様子が見られた。」という成果が児童生徒の姿として見られた。しかし、一方で、「学校として取り組む情報スキルを重視していくと教科のねらいがおろそかになる。」等の課題が生じたケースもあった。これは、県内教員のアンケートから見えた個々の教員の「教科等横断的な視点への意識の不十分さ」や、特に教科担任制である中学校教員で見られた「学校体制で行う総合的な学習の時間の目標や内容と、各教科の内容や資質・能力のつながりの意識の低さ」とも関連があると考えられる。

本研究の目的である「各学校における『教科等横断的な学び』の実現に向けた具体的な方策の提案」に向けて、こうした先進校の実践から得た情報を県内各校で実施できる方法や手順として示す必要性は、昨年度研究でも課題として挙げたものである。同時に、この「具体的な方策」をどのような形で提供していくかを検討することが、今年度研究のスタートラインであり、後述するパッケージ作成へとつながっていく起点となった。

②パッケージ作成に向けた方針（今年度の研究から）

以上を考えると、授業者だけでなく、カリキュラム・マネジメントの視点で学校組織の活性化を図ることも目指したい。そこで、各学校の一助となる内容をパッケージとしてまとめ、提供したいと考えた。これが、本研究の目的に掲げた「具体的方策」としての提案である。重複

するが、本研究は「具体的方策の提案をすることにより、各学校における『教科等横断的な学び』の実現につながる」ことを期待している。パッケージを作ることが目的ではないが、作成に至るプロセスの中で再度提供内容等を精査し、より学校現場にとってメリットのあるものを、と検討を重ねた。以下にその内容を示す。

ア　見えてきた視点

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年12月21日・中央教育審議会）には教科等を学ぶ本質的な意義について次のように示している。

（略）子供たちに必要な資質・能力を育んでいくためには、各教科等での学びが、一人一人のキャリア形成やよりよい社会づくりにどのようにつながっているのかを見据えながら、各教科等をなぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身に付くのかという、教科等を学ぶ本質的な意義を明確にすることが必要になる。

こうした各教科等の意義が明確になることにより、教科等と教育課程全体の関係付けや、教科等横断的に育まれる資質・能力との関連付けが容易となり、各教育課程をどのように工夫・改善すれば子供たちの資質・能力の育成につながるのかという、教科等を越えた教職員の連携にもつながる。

さらに、三つの柱を教科等の文脈に応じて関連づけながら育むことやその枠づくりについても言及している。また、「しまね教育魅力化ビジョン」においても「学びの支えを築く（知識・技能）」、「深め広げ豊かにする（思考力・判断力・表現力等）」、「人生や社会に生かす（学びに向かう力・人間性等）」の要素を相互に関連させバランスよく育成することを示している。ここから、児童生徒が、自らが学んだことや考えたこと等の引き出しを自らで選び開き、様々な場面で活用する、つまり、知識を統合して考え課題解決していく児童生徒の育成を示唆しているのではないだろうか。

そこで我々スタッフは、提示するパッケージの視点として次の２点から精査していくこととした。

・学びの視点

学びは活用してこそ生きた学びとなる。しかし闇雲に学びを捉えるのではなく、国や県が示す三つの柱である資質・能力に則って活用できることを目指したい。目の前の教科の内容だけでなく育成する資質・能力を捉え、ある種の「学び方」や「学んだことの活用」を目指したい。その中には思考習慣*3も含むであろう。つまり、内容ベースではなく資質能力ベースで授業内容を捉える視点から、パッケージの内容を検討していく。

・今あるものを活かす視点

学校組織として教科等の横のつながりを全く意識せずカリキュラムを編成しているかといえば、そうではない。各学校の文化として脈々と息づいているものがあるはずである。例え

*3思考習慣（The Habits of Mind）・・・カリフォルニア州立大学の Arthur L. Costa 教授が開発した、答えがわからない時に賢明に行動するために役立つ16の思考習慣のこと。 すぐには答えのわからない問題に直面した時に賢く行動するための、望ましい思考習慣のこと。“ 粘り強く取り組む ”“ 明確に、考えて、伝える ” というような全部で16の習慣から成り立っている。

ばキャリア教育やふるさと教育、探究的な学習等、土台となっている研究の実践である。起点となっている取組を踏まえ、各教科でベクトルを揃え取組んでいくことは、「教科等横断的な学び」の実施においては、教職員の目線合わせが容易であろう。今あるものを活かし取組のベースとするのである。ここでは、学校組織を運営する上で「カリキュラム」といった視点は必須である。このカリキュラムの編成を第２のベースとし、内容を検討していく。

イ　学校種の取組の実際

「教科等横断的な学びの重要性」については、先に述べたところではあるが、学校種によってその取組（方）には差がある。例えば、小学校においては学級担任としてほぼ全ての授業を行うため、児童の学びの状況や別の教科で学んだことを意識させた授業展開等は容易である。しかし、各学年を意識するような縦の連携については課題があるのではないか。一方、中・高等学校のように教科担任制の場合は全学年の指導を行うため「次学年へつなぐ」といった縦の意識はあるものの、他教科で行っている内容はもとよりそこで培われている資質・能力の具体までは把握しにくい実態[*4]がある。

教科等のつながりを見出そうと全教科の年間指導計画の単元や題材を線で結んだ学校も見られたが、それだけにとどまり次の展開に至っていないケースもある。

ここでの難しさは「何からはじめるか」である。学校全体で実施することはカリキュラム・マネジメントの視点から重要であるが、まずは「隣の先生とつながる」こともスタートラインとしては得策ではないだろうか。しかし、そのためにはどこから切り込むかを整理する必要がある。「教科等横断的な学び」の実現においては、「教科等」の枠を越え「どんな力を育てるのか」といった視点で教科等全体を眺めることは必須であるため、特に教科担任制の学校種においては、「つながるためのきっかけ」を提示することは必須であろう。

さらには、「何からはじめるか」において、授業者自身が現在置かれている状況を俯瞰して捉え、そこからどのような手順を踏み進めていくかを明示することで、方向性が明らかになると考える。

以上、ア及びイを踏まえ、本パッケージを作成する。作成にあたってのポイントは以下に示す。

ウ　作成にあたってのポイント

・授業づくりとカリキュラムづくりの二つからアプローチすること。
・「つながるためのきっかけ」を提示すること。
・ステージ、ステップといった現在置かれている状況を俯瞰して捉え、まずすべきことや目指すことが明確となるようにすること。
・使用者が、より具体的なイメージをもてるようにするために、関連する実践例など、多様な情報をホームページ等にリンクを貼る等行うこと。
・初任者研修での校内研修や経験者研修等での個人研究など、多様な場面を想定し作成すること。

[*4]令和元年度本研究の調査から浮かび上がった実態。

また、「しまね魅力化ビジョン」受け、ふるさと教育の充実も踏まえ、実践例に盛り込むこととした。

③使用者の想定

「教科等横断的な学び」を具体的な教育課程や授業へ落とし込むことに難しさを感じる教員は少なくない。研究・研修スタッフ共同研究「カリキュラム・マネジメントの充実に関する一研究」（平成30年度）では、県内各校において、次の２点の課題が明らかになった。

・各教科等の目標や内容の相互関連が一目でわかるような教育課程表（全体計画や年間指導計画）の作成
・学校の教育目標や重点目標を踏まえた教育課程の教科等横断的な視点で組織的な配列

これら教科等横断的な視点での教育課程作成上の課題は、本研究１年次の県内における実態調査において、小学校よりも中学校に顕著に見られた。中学校は、授業においては、教科担任でもあり、教科等横断的な視点を意識しているものの、学習指導や生徒指導、進路指導など多岐に渡る職務にあって、教科等横断的な視点について体系的に整理する機会は持ちにくく、多くが個々の解釈のもとに実践を進めていることが推察できる。

また、昨年度の島根県教育センターで行われたカリキュラム・マネジメントに関連する各研修の受講者からは、「教科等横断的な視点については、何をどうしたらいいかを具体的に考えにくい。」という声が寄せられ、実践にあたって進め方や考え方を模索する実情があることがわかる。

そこで、前述のとおり本研究では、現在の自身の教育実践と照らし合わせながら「教科等横断的な学び」づくりの在り方を理解し実践したいと考える教員（主として中学校教員）を対象に、実践につながる内容をパッケージとしてまとめることとした。カリキュラムづくりと授業づくりの両面からアプローチすることで、「教科等横断的な学び」づくりの一助となるのではないかと考える。より具体的な提案となるように中学校教員の実践例を示すことで、同じく教科担当制の高等学校教員が見ても参考になるのではないかと考えた。また、小学校教員や特別支援学校教員が見ても参考になるよう基本的な考え方や手順について、汎用的な視点をもって示すこととした。

しかしながら、カリキュラム・マネジメントの一側面としての「教科等横断的な学び」は最終的にはどの教職員も意識してほしい側面ではある。そこで、誰もが取り組みやすいと感じられるようなアプローチも必要であると考えた。さらに、「教科等横断的な学び」の手掛かりとしての媒体も同時に提供していきたい。これについては後述する。

④使用場面の想定

我々が作成する「教科等横断的な学びのパッケージ」をどのような場面で使用できるかを以下のように想定した。

○学校教育目標の実現のための校内研修や校内研究として
・各学校で目指す資質・能力を育成するための取組を構想する場面
・ふるさと教育を推進する取組を構想する場面
・キャリア教育を推進する取組を構想する場面
○初任者研修、経験者研修の授業づくりの研修として
・授業づくりについて、取り組もうとする場面
・授業づくりについて、同僚と相談する場面
・カリキュラム・マネジメントについて、取り組もうとする場面
○個人の授業実践の参考資料として
・自分の授業づくりについて、教科等横断的な視点から取り組もうとする場面

教科等横断的な視点で教育の内容等を組み立てていくことは、カリキュラム・マネジメントの一側面であることから、多くの場面で学校全体として組織的に取り組むことが求められる。一方、「②パッケージ作成に向けた方針」で述べたように、「どこからはじめるか」に難しさもある。まずは、「つながるためのきっかけ」として「隣の先生とつながる」場面で、この「教科等横断的な学びのパッケージ」が重要な役割を果たせることを期待したい。

⑤パッケージの構成の構想

以上をふまえ、パッケージの構成を以下のように構想した。

○教科等横断的な学びとは
・教科等横断的な学びについて解説する
○セルフチェック
・自校や自分の状況把握や取組の手順をステージやステップで示す
○実現のためのポイント（カリキュラム編）
・校内で取り組む流れを示す
○実現のためのポイント（授業編）
・授業の実践例を掲載する
○教科等横断的な学びのメリット
・実践校からの実際の声を掲載する

これらの構想をもとに、まずは、学校で先生方が手に取り、「教科等横断的な学び」のすすめ方が一目でわかるガイド的な資料、その詳細を示すために島根県教育委員会のホームページに掲載する資料、校内研修等で活用できるようにした資料等により、使用者に応じた資料提供を行いたい。

（2）教科等横断的な学びの実現に向けたリーフレットの作成

①ガイドの役割としてのリーフレットの構成

各校における「教科等横断的な学び」の実現に向け、実践に向けての具体的な内容や方法、手順を示す「教科等横断的な学びパッケージ」（以下、「パッケージ」）に導くための「教科等横断的な学びの実現に向けたリーフレット（仮称）」（以下、「リーフレット」）を提案する。

本研究の１年次に行った島根県内小中学校の「教科等横断的な学び」の実施状況の傾向を探るための意識調査（以下、「意識調査」）において、中学校では、小学校に比べて「教科等横断

的な学び」の実施が進んでいない傾向が見られたことから、パッケージ同様リーフレットも中学校教員を対象とした。対象を絞ることで、より具体的に実践に向けての内容や方法、手順を示すことをねらうとともに、いくつかの語を変換することで小学校教員にも理解できるようにした。

構成する項目は、実践に向けての具体的な内容は、方法・手順が簡単に捉えられるように次の５項目とした。

○「教科等横断的な学び」の簡単な説明
・「教科等横断的な学び」という語は本研究で定義付けたものであることから、リーフレットでその意味を解説する必要がある。また、「教科等横断的な学び」を実現することの意義について、児童生徒、教師及び学校のそれぞれの視点から解説を加える。
○リーフレット活用の目的
・興味を喚起するために、このリーフレットをどんな時に活用するかを示す。
○「教科等横断的な学び」に対する意識の把握
・簡単に自身や自校の「教科等横断的な学び」に対する意識や理解のレベルを確認することで、現段階での自身の状況から具体的な実施の手順を示す。
○「教科等横断的な学び」の手順等
・見通しをもって取り組めるように、手順の全体像を掲載する。
○用語の解説
・手順に沿って円滑に実践を進めるうえで理解しておくことが必要な語について、解説する。

②「教科等横断的な学び」の手順等について

ここで、前項で示した「手順等」について我々スタッフの見解を述べたい。「教科等横断的な学び」を進めるための手順として示すために、まず、自身の「レベル」を知ること、その上でどう進めていくのかを確認していくことが必要ではないかという見解に至った。進めるにあたって、「教科等横断的な学び」の自身及び自校の状況を把握する必要があると考えた。そこで、状況把握から分かった自身や自校の段階を「ステージ」、その段階に合わせて次の「教科等横断的な学び」の具体的な取組を「ステップ」して位置付けることとした。

各スタッフがそれぞれ試行的に作成したステージ（右図）は、ステージ毎の段階と具体的な教員の姿が一覧表のように示されたもの（**試案①**）、前述のキーワードである「つながり」のレベルに合わせて段階を図で示したもの（**試案②**）、さらにその状況を16に分割して、左右に広がったコマのような図にしたもの（**試案③**）など、示し方は様々だった。ただし、共通していたのは、**①研究の視点である「カリキュラムづくり」と「授業づくり」の両面で各段階を示す**こと、**②年間指導計画や単元配列表などの活用の仕方によって段階を分ける**こと、**③他の教員や学校における連携で段階を分けることで、個人から学校体制までの広がりを持たせる**こと、**④学びを通して教科等をつなげるのは「内容」によってなのか「資質・能力」によってなのか、また育成する資質・能力についても「教科の資質・能力」なのか「学校で目指す資質・能力」なのかで段階を分ける**こと、等であった。

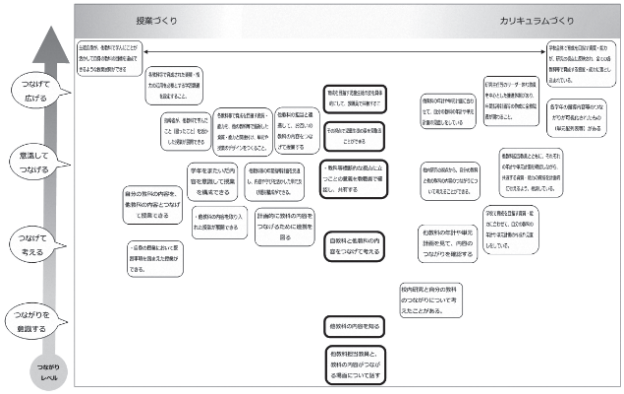
段階を把握することで、今行っていることが「教科等横断的な学び」への取組となることを価値付けるのと同時に、これから目指すべき、さらに上の段階としての取組を見通せること、

できていないことを否定的に捉えるのではなく、より充実した「教科等横断的な学び」につなげてほしいという意図が見えた。

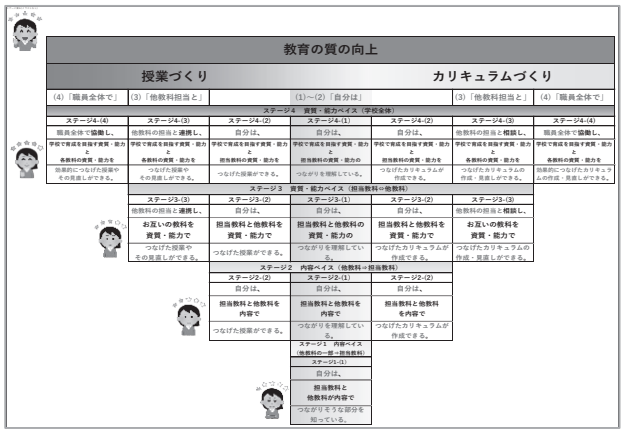
また、具体的な実施内容を示す際に教科等をつなげるのは「内容」か「資質・能力」かといった点を整理しなくてはならない。言うまでもなく「資質・能力」を学校全体で意識してマネジメントしていくことが大前提であるのだが、昨年度の研究から見えてきた県内の実践においては「どこから実施してよいかわからない」といった状況が見えている。このことから、いきなり「資質・能力を意識してつながる」のではなくまず自身の教科と他教科がどのような内容でつながっているのかを見渡し、そこで授業を展開することを初歩のレベルとし、実施していく中で徐々に資質・能力についても意識しながら、組織としてカリキュラム・マネジメントの視点に迫ることができるような手順を踏んではどうかと考えた。次に「ステージ」及び「ステップ」についてリーフレットの構造を踏まえて示す。

		ステージ1	ステージ2	ステージ3	ステージ4
授業づくり	授業	・各教科等で既習事項を踏まえた授業ができる。	・他教科等の内容（学んだこと・学ぶこと）を取り入れた授業ができる。	・他教科等の資質・能力(身に付けたか・身に付けたいか)を取り入れた授業ができる。	・各教科等で育成された資質・能力の活用を必要とする学習課題を設定することができる。
	教科等横断的な視点に立った資質・能力		・教科等ごとの枠の中だけでなく、教科等横断的な視点をもったり、教科等間の指導の関連付けを図り活用できる力を育むことを目指したりした授業ができる。 ・「学習の基盤となる資質・能力」や「現代的な課題に対応して求められる資質・能力」を意識した授業ができる。		
	教員の連携	・先生方と、教科等の内容がつながる場面について話したことがある。	・先生方と教科等の内容を計画的につなげるための相談をしている。	・先生方と教科等の資質・能力を計画的につなげるための相談をしている。	・学校全体で、育成を目指す資質・能力を明確にして、年間指導計画等の作成や見直しについて、定期的に話し合いを行っている。
カリキュラムづくり	学校教育目標との関係	・学校教育目標や目指す児童生徒像（校内研究）とそれぞれの教科等の内容のつながりについて考えている。	・学校教育目標や目指す児童生徒像（校内研究）の視点から、各教科等の内容の相互のつながりについて考えている。	・学校教育目標や目指す児童生徒像（校内研究）の視点から、各教科等の資質・能力の相互のつながりについて考えている。	・学校全体で育成を目指す資質・能力と、全ての各教科等で育成する資質・能力とのつながりについて考えている。
	年間指導計画等	・各教科等の年間指導計画や単元配当表等を見て、それぞれの流れや内容、育成したい資質・能力を把握している。	・各教科等の年間指導計画や単元配当表等を並べて見て、内容の相互のつながりについて考えている。	・各教科等の年間指導計画や単元配当表等を並べて見て、資質・能力の相互のつながりについて考えている。	・学校全体で育成を目指す資質・能力と、全ての各教科等の年間指導計画や単元配当表等とのつながりについて考えている。
	PDCA		・教科等横断的な学びを踏まえた単元・題材を計画し、実施する。	・教科等横断的な学びを踏まえた単元・題材について、年間指導計画等に位置付けて継続して取り組むことができるようにする。	
			子ども視点で考える		

ステージ試案①



ステージ試案②



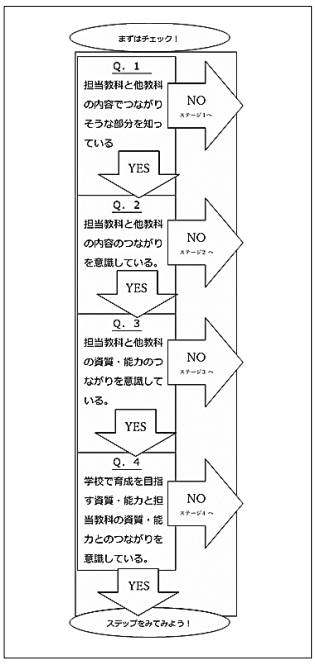
ステージ試案③

③ステージについて

ステージについては、当初は、ステージの内容として、使用者が自分の状況を具体的に把握できるよう、段階毎の教員としての在り方をかなり細かく表現していた。しかし、具体的な取組であるステップの内容と重複する部分もあった。そこで、先ほどの共通の項目である①～④の違いを表や図ではなく、シンプルな文章で示すことで、最終的には「YES/NO」で答えられる４段階のステージの示し方（次ページ図）に変更した。試作当初に検討材料であった、ステージをよく読み込まないと自分の段階を把握できないというデメリットも解消できた。加えて、これはリーフレットの構造となるが、「NO」の矢印の方向に進んでページを開くと、そのままこれから取り組んで

いくべきステップの内容と直結する形となり、ステージとステップのつながりを、より明確に見せられるよう改善を図ったものとした。操作性のあるものとすることで、左右に開きながら段階を確認できるようになっている。

ステージとステップのつながりの詳細については後述するが、共通した項目である①の「カリキュラムづくり」と「授業づくり」の両面で示される各段階は、ステージ毎のステップでの取組に、PDCAの視点から分類された形で示されている。また、ステージ毎の違いを示す②～④についても、ステップ内の各ステージを示す言葉や、ステージの段階が上がるに従って増えていくキーワードの形で反映されることとした。



④ステップについて

ステージを設定した後、ターゲットである中学校教員を対象とした「教科等横断的な学び」の実現に向けたステップを作成した。まずは、ステージ３「担当教科と他教科の資質・能力のつながり」を意識したステップを考案･検討し、それをもとに他のステージのステップを作成した。

（１）教育課程の編成に対する学校の基本方針を明確にする。
（２）教育課程の編成・実施のための組織と日程を決める
（３）教育課程の編成のための事前の研究や調査をする。
（４）学校の教育目標など教育課程の編成の基本となる事項を定める。
（５）教育課程を編成する。
（６）教育課程を評価し改善する。

作成に当たり、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総則編』第３章教育課程の編成及び実施の「４　カリキュラム・マネジメントの充実」に挙げられている（手順の一例）を参考にした。

実施に当たっては､｢校長の方針の下に､校務分掌に基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行う」ことが必要である。（１）～（６）を校長のリーダーシップの下、教職員で取り組むことが求められる。しかし､リーフレットは授業者を対象とするため､主に「（５）教育課程を編成する。」と「（６）教育課程を評価し改善する。」に記載してあることを参考にした。

（５）教育課程を編成する。
　ア　指導内容を選択する。
　　（ア）指導内容について、その基礎的・基本的な知識及び技能を明確にする。
　　（イ）学校の教育目標の有効な達成を図るため、重点を置くべき指導内容を明確にする。
　　（ウ）各教科等の指導において、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得と思考力、判断力、表現力等の育成を図るとともに、主体的に学習に取り組む態度を養う指導の充実や個に応じた指導を推進するよう配慮する。

（エ）学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育及び体育・健康に関する指導について、適切な指導がなされるよう配慮する。
（オ）学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力など、学校として、教科等横断的な視点で育成を目指す資質・能力を明確にし、その育成に向けた適切な指導がなされるよう配慮する。
（カ）生徒や学校、地域の実態に応じて学校が創意を生かして行う総合的な学習の時間を適切に展開できるよう配慮する。
（キ）各教科等の指導内容に取り上げた事項について、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して資質・能力を育む効果的な指導ができるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、そのまとめ方や重点の置き方を検討する。
イ　指導内容を組織する。
（ア）各教科、道徳科、総合的な学習の時間及び特別活動について、各教科等間の指導内容相互の関連を図る。
（イ）各教科等の指導内容相互の関連を明確にする。
（ウ）発展的、系統的な指導ができるように指導内容を配列し組織する。
ウ　授業時数を配当する。
（ア）指導内容との関連において、各教科、道徳科、総合的な学習の時間及び特別活動の年間授業時数を定める。
（イ）各教科等や学習活動の特質に応じて、創意工夫を生かし、１年間の中で、学期、月、週ごとの各教科等の授業時数を定める。
（ウ）各教科等の授業の１単位時間を、生徒の発達の段階及び各教科等や学習活動の特質を考慮して適切に定める。
（６）教育課程を評価し改善する。
ア　評価の資料を収集し、検討する。
イ　整理した問題点を検討し、原因と背景を明らかにする。
ウ　改善案をつくり、実施する。　「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総則編」

これらをもとに、はじめにステージのスタートとゴールを検討した。スタートはステージ２を終えた状態「『担当教科等と他教科等の内容のつながり』を理解している」として、ゴールをステージ３の「『担当教科等と他教科等の資質・能力のつながり』を理解している」と設定した。中学校で授業を展開している場合、「つなげる」ことの中心としてあるのは、多くの教員にとっては自分の担当している教科であろう。求める高次の姿としては、学校全体を見渡してカリキュラム全体を捉えることだが、今回想定するリーフレットを手にする教員のほとんどが、「自分の教科とどうつなぐか」を一歩目として考えるのではないか。そこで、自分の教科を「担当教科等」、他の教員が担当する教科を「他教科等」として示し、その２つの教科をつなぐこととした。

次に、前項で触れたステージやステップに用いる「内容」の捉えである。単元や題材で取扱う教材・教具、学習テーマや学習活動などを「内容」とした。そして、各教科等や学校として育成する「資質・能力」を明確にすることが重要であると考え、ステージやステップに反映させた。しかし（手順の一例）には、「指導内容」という語句が用いられている。これは各教科等で育成する「資質・能力」を含めたものとなっているのではないかと協議し、リーフレットには「内容」と「指導内容」*5について分けて記載することとした。

続いて、ステップの作成についてである。当初は、「授業づくり」「カリキュラムづくり」の

*5 リーフレットには「内容」とし、授業等での学習テーマや学習事項のことを示している。

２つの視点でステップを分けたり、順序立てたりしようと試みたが、２つの視点が強く関わり合っている部分が多くあり、２つを明確に分けないことにした。また使用者にとって順を追いながら分かりやすく示すため、ＰＤＣＡの流れで作成した。他にも使用者を想定して、資質・能力については、（身に付けた力・身に付けたい力）とイメージしやすい言葉を付け加えたり、（手順の一例）と結びつけられる部分を括弧（　）内に記載したりしている。

Pでは①自らの担当する教科の資質・能力を確認し、次に②他教科の資質・能力を確認し、そして、③どのように結びつけたり活用したりできるかを考え、④具体的な単元・題材を想定する手順とした。**D**では⑤授業を行うが、教科等横断を教師が意識することはもちろんであるが、生徒にも意識させたい。さらに、生徒自らが教科等の学びを活用できるようにすることが理想ではないかと考え、括弧（　）内に教師の手立てなどを記載した。また、「つながる」「つなげる」という言葉をより分かりやすく伝えるために、「・他教科で身に付けた力を担当教科で活用する授業・担当教科で身に付けた力を他教科で活用できるようにする授業」という具体的な授業を想定した。**C**と**A**についても、（手順の一例）を参考に設定した。ＰＤＣＡサイクルを回すこと、あるいは、それを繰り返すことが「担当教科と他教科の資質・能力のつながりを理解する」ことにつながると考えた。以下に作成したステージ３ステップ①～⑦を示す。

スタート		担当教科と他教科の内容のつながりを理解している。
P	①	担当教科で育成する資質・能力（身に付けた力・身に付けたい力）について確認する。（指導内容について、その基礎的・基本的知識及び技能を明確にする。）
	②	他教科で育成する資質・能力（身に付けた力・身に付けたい力）について確認する。（指導内容について、その基礎的・基本的知識及び技能を明確にする。）
	③	教科等間の指導内容相互の関連や資質・能力（身に付けた力）の活用について考える。
	④	いつ、どの単元・題材で、どのような指導で取り組むか考える。 （発展的・系統的な指導ができるように指導内容を配列する。授業時数や一単位時間の構成を定める。）
D	⑤	教科等横断を意識して、（身に付けたい力を育成する）授業を行う。（生徒自らが気付けるように…） ・他教科で身に付けた力を担当教科で活用する授業 ・担当教科で身に付けた力を他教科で活用できるようにする授業
C	⑥	生徒の姿から資質・能力（身に付けた力）の活用について成果や課題を振り返る。 （評価の資料を収集し、検討する。整理した問題点を検討し、原因と背景を明らかにする。）
A	⑦	事後や次年度に生かせるように改善案をつくり、実施する。
ゴール		担当教科と他教科の資質・能力のつながりを理解している。

そして、このステップをより効果的に進められるように、キーワードを設定した（次ページ図）。キーワードは、ステージ２は１つ、ステージ３は２つ、ステージ４は３つと、ステージ２から上がるにつれて１つずつ増えるようにした。キーワードと各ステップをつなげることで、「教科等横断的な学び」の実現に向けて、効果的に進める文章となるように設定した。

ステージ３のキーワードの１つめは、「他（担当）教科等の先生と連携して、」である。「教科等横断的な学び」は一人で進めるよりも、複数の教員で連携しながら進めた方が効果的であると考え、このステージからのキーワードにしている。２つめは、「年間指導計画や単元配列

表を操作しながら、(線で結ぶ、加筆する、順番を入れ替えるなど)」である。一覧表で年間の流れや配列が分かるものがあり、さらにそれを実際に線で結んだり、加筆したり、順番を入れ替えるなど操作することで、より「教科等横断的な学び」に取組みやすくなると考えた。これは、ステージ２からのキーワードである。例えばステージ３のステップ④は、「他教科の先生と連携して、年間指導計画や単元配列表を操作しながら、いつ、どの単元・題材で、どのような指導で取り組むか考える。」となる。

その先のステージ４ではキーワードに「学校で育成を目指す資質･能力を､」を加えた。また、「他（担当）教科等の先生と連携して､」を「教職員全体で共有して､」に換えている。これらは、学校教育目標実現のために学校全体で取り組む姿を想定している。このリーフレットではステージ４を「教科等横断的な学び」の最終段階と想定している。例えばステージ４のステップ⑤は、「学校で育成を目指す資質・能力を、教職員全体で共有して、年間指導計画や単元配列表を操作しながら、事後や次年度に生かせるように改善案をつくり、実施する。」となる。

ステージ３・４　本研究リーフレットより

（3）リーフレットの改善点と想定される使用場面

学校現場目線で改善を図る必要があることから、リーフレット（試作版）に対して、島根県西部の小中学校教員（７名、管理職含む）にリーフレットを提案し、学校現場でより活用しやすいものになっているか検討会を実施した。主な意見として次があげられる。

リーフレット（試作版）に対して
＜リーフレットのよさ＞
・操作性があり、やってみたくなる。
・現状と取組みのチェック後、各ステージへの誘導がわかりやすい。
＜リーフレットの改善点＞
・小学校教員としては、(他教科という語があるので）ぱっと見ると違和感を覚える。
・もらっただけでは、1人で取り組むには難しい。なんらかの解説がほしい。
・「教科等横断的な学び」についての具体例がほしい。
・ステージ毎のＰＤＣＡが1サイクルで示しているが、実際には何度も回すことになるのではないか。
・どこに向けて、何を知らせて、何をさせたいのかが明確になっていない。
・ゴールしたらどうなるのかが具体的な姿として示されるとよい。
・具体的な事例があれば、イメージしやすい。

リーフレットの活用場面について
＜初任者研修＞
・初任者研修の一般研修の中で、指導教員と共に、カリキュラム・マネジメントについて考える資料として活用できる。
・初任者研修の示範授業の振り返りで、授業の視点を確認する資料として活用できる。
＜中堅教諭等資質向上研修＞
・中堅研該当者がカリキュラム・マネジメントの視点を持ち課題研究に取り組む資料として活用できる。
＜校内研究＞
・校内研究の視点として，職員全体で方向性を確認するときの資料として活用できる。
・研究主任研修で使用できる。
＜カリキュラム・マネジメント＞
・自分のステージを確認し，どの教職員がいるか確認して，「次年度のスタート」と「最後」に確認する。
・カリキュラム・マネジメントはまだまだ伝わっていないため、職員研修で活用する。
・管理職として、教職員の授業を見る視点として活用できる。
・教育課程を組む際の視点で活用できる。
・単元計画を考える際に活用できる。
・各学期を振り返るときに活用できる。
・カリキュラム・マネジメントを全校体制で進めていく際に，教員1人1人の現状を把握するために、事前に全員でやってみる。

ここからリーフレットに対する二つの課題が見えた。一つ目は「『教科等横断的な学び』の目的を明確にすること」であり、二つ目は「『教科等横断的な学び』を進める上でのハードルを下げること」である。この課題を受け、以下の２つの改善を加えた。

＜一つ目の課題についての改善点＞
・キーワード（「資質・能力」、「内容」）の解説に併せ、「教科等横断的な学び」による意義や効果を加筆した。
・リーフレット活用の目的を明記した。

＜二つ目の課題についての改善点＞
・現在の授業場面と関連付けて捉えるために、キーワードの解説に「例えば理科の…」と実際の授業を例にあげた。
・取組の手順をより具体的な理解へと導くために、各ステージの具体の実践や漫画形式での解説をリーフレットにリンク付けした。また、ステージに進みながら自分の授業をより具体的に構想するために別葉としてワークシートを添付することとした。

また、リーフレットについて学校現場での三場面での有用性も見えた。一つ目に、「研修における活用」である。「教科等横断的な学び」は、個々の教員の取組だけでは実現しない。また、理解の浅いうちは一人で取り掛かることも容易ではない。そこで、初任者研修では指導教員と、中堅教諭等資質向上研修では校内チーム員とともに、校内研究に係る研修では研究主任のリーダーシップのもとでリーフレットを活用し、理解を深めたり取組の方向性を見出したりすることができるのではないか。二つ目に、「カリキュラム・マネジメントにおける活用」で

ある。教育課程や単元計画を作成する際の一視点として､評価･改善の一視点としてリーフレットを活用することが考えられる。リーフレットをもとに共通理解を図ることで、個々の解釈による取組を超えた学校全体としての取組が実現するのではなかろうか。三つ目に、「授業改善に向けた活用」である。指導技術や一単位時間の授業構想に加えて、授業や単元（題材）で育成される資質・能力が活用されるものとして育まれているか、児童生徒がすでに有している資質・能力を学びの場面で発揮しているかの視点から授業改善を進めることが求められる。管理職や指導主事がリーフレットを活用し、授業改善に向けた次の取組を助言することも考えられるのではないか。

５．本研究による成果と今後の方向性

本研究を進めるにあたって、多くの方の協力や助言を得ながら、具体的方策の提案として、成果物であるパッケージやリーフレットを作成することができた。特に、リーフレット作成の内容については、島根県立大学 人間文化学部 高橋泰道 教授　に「総合的な学習の時間」や「総合的な探求の時間」の視点からご助言いただいたことは大きい。

本研究は「教科等横断的な学び」をすすめるためにどのように学校に提案すればよいのか、からスタートした｡結果､昨年度の様々なアンケートから本研究の対象を中学校に絞ることとした｡また、カリキュラム・マネジメントの実施は学校全体・組織全体で行うものである。しかし、そこに向けてのハードルが高いといった実態もあることから、まずは隣の先生と教科で「つなぐ」「つながる」ことを一歩と考え２年次の研究をスタートしている。このことを踏まえ、今回の研究における成果と課題を次にまとめる。

（１）本研究の成果～研究のプロセスで見えてきたこと

１点目として、教科等のつなげ方の違いにより、「授業づくり」と「カリキュラムづくり」の両面から各段階を示すことができたことを成果としたい。これにより、リーフレットの使用者が取り組む手がかりを示すことができたと考える。本研究では､そのプロセスの中で「授業づくり」と「カリキュラムづくり」を両輪で進めることやその示し方について幾度となく議論している。結果、パッケージやリーフレットを作成する中で、この二つの側面からアプローチしていくことが､「教科等横断的な学び」を構築する上で欠かせないものであることは、必ず提示したいこととして明らかとなった。

２点目は､「学びの視点」と「今あるものを活かす視点」の二つの視点を、教科等横断的な学びを進めるためのポイントとしてあげたことである。これは､「教科等横断的な学び」を進めるための資料作成の指針となった。小学校と中学校では学校における１日のカリキュラムや、授業の持ち方が「１日」か「教科」かによっても異なる。例えば１時間目から５時間目まで終日様々教科を児童に提供する小学校教諭は、前時の授業内容をうまく活用するなどしながら学びを進化させていくことについては取組みやすい。一方、中学校においては、他教科が何を行っているのかを知ることすらできていない状況もある。そのために「言語活動の充実」や「問題解決学習」

等を共有のための軸として設定すれば､取組の突破口となるのではないか｡｢総合的な学習の時間」や「生活科」における各校の取組を価値づける手立てとして、このリーフレットを用いることができるはずである。

（2）今後の方向性～「教科等横断的な学び」パッケージの活用の提案

教育センター研修の初任者研修･６年目研修･中堅教諭等資質向上研修において、「授業づくり」におけるねらいを設定している。島根県公立学校教育職員育成指標を踏まえながら、段階に応じて、

・初任者研修「児童生徒を主体とし、本時の目標に迫る授業ができる。」
・６年目研修「児童生徒等の実態を踏まえ、単元（題材）の目標に迫る授業ができる。」
・中堅教諭等資質向上研修「カリキュラム・マネジメントを意識し、教科等の目標に迫る授業ができる。」としている。

「教科等横断的な学び」は、カリキュラム・マネジメントの三つの側面の一つ「教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」と大きく関わる。従って、中堅教諭等資質向上研修においてリーフレットを活用することでより効果的に本研修に取り組んでいくことができるのではないだろうか。具体的には､｢授業づくり｣の研修と｢カリキュラム・マネジメント」の研修において活用できると考える。例えば､「カリキュラム・マネジメント」の講義は､三つの側面について説明をしたり具体例を示したりしながら進めていくが､｢教科等横断的な視点で組み立てていくこと」について受講者が具体的にイメージするための手立てとして、リーフレットを使用したい。

６．今後の課題

（1）取り上げなかった校種について

本研究では、小学校と中学校を取り上げて教科等横断的な学びについて研究を進めてきた。その中で、高等学校や特別支援学校での取組についても、たびたび議論に上がったが、具体的な提案として示すことができなかった。しかし、本研究で取り組んだ小・中学校の研究は、高等学校や特別支援学校で取組む際にも基盤となるものと考えている。今後は、さらに高等学校や特別支援学校の実践例も収集しながら、より多くの学校現場で活用できるような資料として示したいと考えている。

（2）ふるさと教育について

「しまね魅力化ビジョン」の基本理念に「ふるさと島根を学びの原点に（以下略)」とあるように、今後「教科等横断的な学び」にふるさと教育も大きく関わってくると考えられる。ふるさと教育の実践としては、「浜田教育事務所だより第81号」で紹介された美郷町立邑智小学校の取組が大変参考になる。取組の様子を抜粋すると、

・校長は小中学校で、共通のふるさと教育に関わるキーワードを教育目標の中に入れている。

・担任は、各教科、単元のねらいに結びつくように活動を計画し、総合的な学習の時間が理科、社会、国語、道徳等、教科・領域横断的な学習となるように“学びの文脈”を整理し、児童の学びに向かう力等の育成に努めている。

とある。学校で育成を目指す資質・能力を学校教育目標に掲げて取り組んでいる姿は、我々が作成したリーフレットのステージ４にあたる実践と考えることができる。このような取組を実践事例として紹介することで、ふるさと教育と共に「教科等横断的な学び」のさらなる充実につながると考えている。

（３）ICT の活用について

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）（令和３年１月26日中央教育審議会）」の「５．『令和の日本型学校教育』構築に向けたICTの活用に関する基本的な考え方」では、「（１）学校教育の質の向上に向けたICTの活用」において、

> ・ICT の活用により新学習指導要領を着実に実施し、学校教育の質の向上につなげるためには、カリキュラム･マネジメントを充実させつつ、各教科等において育成を目指す資質･能力等を把握した上で、特に「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に生かしてしくことが重要である。

と示されている。今後、GIGA スクール構想により学校の ICT 環境が急速に整備され、学校教育の基盤ツールとして ICT は必要不可欠なものとなる。ICT を活用すること自体が目的にならないよう留意しつつ、教育の質の向上のための ICT 活用について、教科等横断的な視点からも検討していきたいと考えている。

７．おわりに

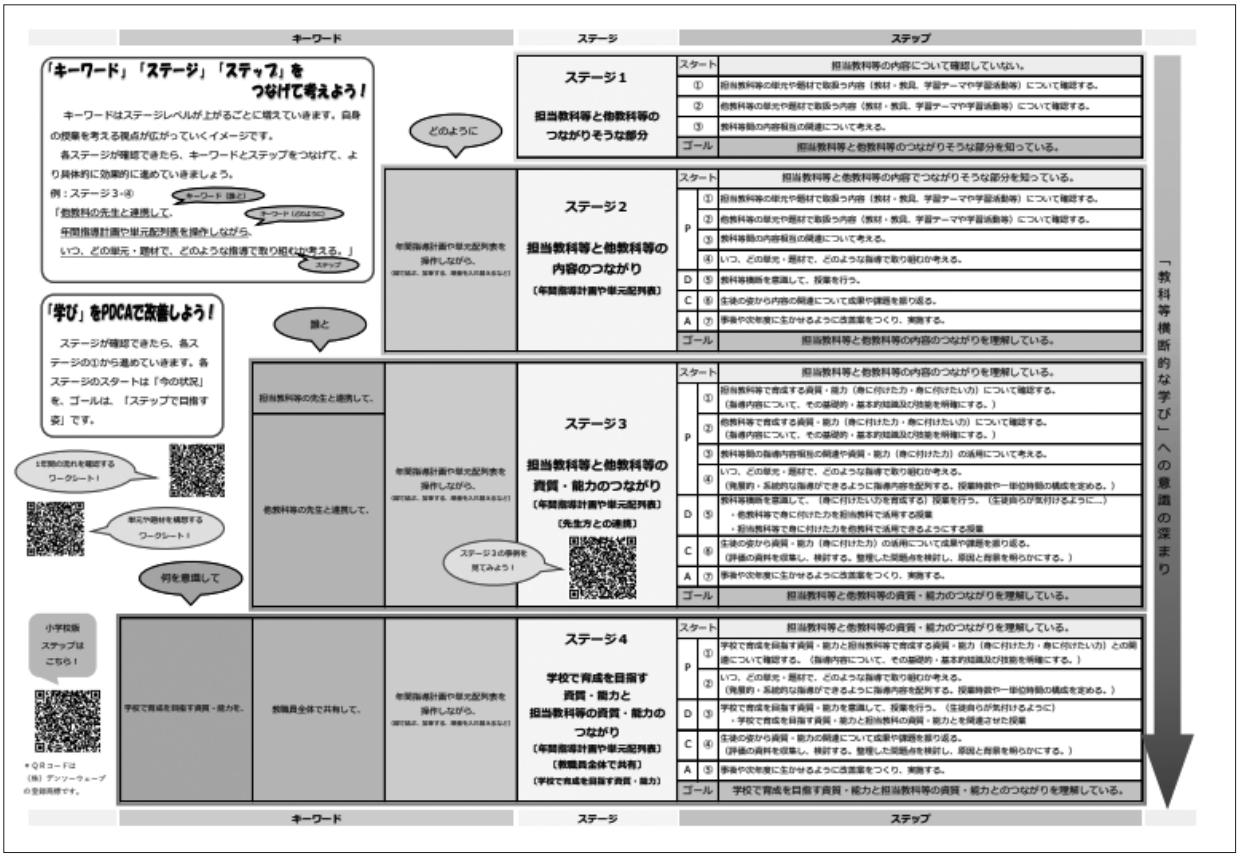
本研究の２年次は、コロナ禍により十分に実際の授業実践と関連させながら取組むことが困難であった。しかし、県西部の教職員の有志で結成される学習会の協力により、一教員・スクールリーダー、両者の立場として、本研究に対し客観的な視点から示唆をいただいている。このことは、我々スタッフにとって大きな学びとなった。「教科等横断的な学び」について、本研究を通して得られた成果をさらに発展できるよう、今後も学校現場のニーズを把握しながら研究を積み重ねることで、県内各校の「教科等横断的な学び」の充実に寄与したいと考えている。

最後に、本研究を進めるに当たり、ご協力いただいた皆様には、感謝の意を表したい。

なお、本研究は、島根県教育センター浜田教育センター研究･研修スタッフ　澄川由紀、三島浩、上野暢彦、三浦伝、中村典子が共同でおこなったものである。

＜本研究作成資料＞

教科等横断的な学びとは？
＊児童生徒が、ある教科等の学びを他の教科等の学びで活用したり関連づけたりすることで、学びが深まったり、活用できることを実感できたりするような学びです。
＊教師にとっては、限られた時間の中で実践の効果を高めたり、一つの体験や学習内容を複数教科等に活用することにより、カリキュラムのスリム化につながったりします。
＊学校にとっては、カリキュラム全体で児童生徒を育てる意識を促し、先の見通しをもった実践へとつながります。
＊島根県教育センター浜田教育センター研究・研修スタッフ研究の中で、学習指導要領で示された「カリキュラム・マネジメント」の側面の一つに係る取組を「教科等横断的な学び」と示しています。
ゆんがでイメージ！
つなぐ！つなげる！活用する！
教科等横断的な学び
島根県教育センター浜田教育センター
研究・研修スタッフ2名 研究成果物
このリーフレット活用を通して
このリーフレットは、島根県教育センター浜田教育センター研究・研修スタッフの研究の取組として作成しました。教科等横断的な視点のある授業等に取組むために、今の実践や学習が教科等横断的な視点での学習になっているか、今後どのような方向へ進めば良いのかを知るためのものです。
自分のステージを確認したら、その先を明きましょう…
ここでの「資質・能力」とは？
学習指導要領には「学校教育において目指している全人的な「生きる力」を児童生徒に育んでいくためには、各教科等の特質に応じた資質・能力の育成を図っていくことと同時に、各教科等で身に付けた資質・能力を様々な場面で統合的に働かせることができるよう、知識と生活との結び付きや教科等横断的な視点を重視した教育を行っていくことが必要である。そのためには、教科等の目標や内容の一部についてこれらを併せて指導を行ったり、関連させて指導を進めたりすることが効果的である場合も考えられる。」と示しています。そのためにも、各授業等で何を目指すのか、どんな力を育むのか、を明確にしておくことが大切です。資質・能力としては、次があげられます。
・各教科等の枠組みを踏まえて育成を目指す資質・能力
・学習の基盤となる資質・能力（例えば、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）
・現代的な課題に対応して求められる資質・能力（健康・安全・食に関する力等）
ここでの「内容」とは？
・授業等での学習テーマや学習事項のことを示します。例えば、理科の「流れる水の働きと土地の変化」と社会の「自然災害」といった内容を関連づけて授業の内容を実施した場合、児童生徒は習ったことを活かして深く考えたり、活用したりできます。このことで、より実感を伴った学びにつながります。
自分がどこまで意識しているかを確認することで、今何をすべきなのかが見えてきます。次のステージに進めるよう、示されている項目を確認して授業づくりに活かしましょう。
下のステージに向かうほど、教科等のつながりや学校組織とのつながりを意識した教科等横断的な学びを実現できていることになります。
今、まさに直面しているコロナ禍や大震災、社会の様々な急速な変化等々。これからの予測が困難な時代を生き抜くためには、「未知の状況にも対応できる力」、一人で考えるだけではなく、様々な力を結集させて、様々な未知の課題を解決していく「全人的な力」の育成が必要です。そのためには、「総合的な学習」の充実だけでなく、各教科等においても教科等横断的な学習を充実させることが大切です。
「総合的な学習」での「探究的な見方・考え方」は、子どもたちが各教科等で身に付けた見方・考え方を総合的に活用して実社会や実生活、自己の生き方などと関連づけて問い続けることです。このように、各教科等における見方・考え方を働かせ、各教科等で身に付けた資質・能力を活用・発揮することが、「全人的な力」の育成につながっていくのです。
さらに、教科等横断的な学習が実現できれば、各教科の資質・能力の育成とともに、学習の基盤となる資質・能力や現代的な課題に対応して求められる資質・能力、即ち「全人的な力」のより一層の育成が期待できるでしょう。
まずは、教科等横断的な学びへの一歩として、このリーフレットを参考にしてみませんか。 R3.3月 島根県立大学 教授 高橋泰道
スタート
まずは、自分の「理解度」をチェック！
Q. 1 担当教科と他教科の内容でつながりそうな部分を知っている
NO ステージ1へ
YES
Q. 2 担当教科と他教科の内容のつながりを意識している。
NO ステージ2へ
YES
Q. 3 担当教科と他教科の資質・能力のつながりを意識している。
NO ステージ3へ
YES
Q. 4 学校で育成を目指す資質・能力と担当教科の資質・能力とのつながりを意識している。
NO ステージ4へ
YES
学校全体の取組を見直して、フラッシュアップ！


キーワード
ステージ
ステップ
「キーワード」「ステージ」「ステップ」をつなげて考えよう！
キーワードはステージレベルが上がるごとに増えています。自身の授業を考える視点が広がっていくイメージです。
各ステージが確認できたら、キーワードとステップをつなげて、より具体的に効果的に進めていきましょう。
例：ステージ3-④
「教科の先生と連携して、年間指導計画や単元配列表を操作しながら、いつ、どの単元・題材で、どのような指導で取り組むか考える。」
キーワード（誰と）
キーワード（どのように）
ステップ
どのように
誰と
何を意識して
「学び」をPDCAで改善しよう！
ステージが確認できたら、各ステージの①から進めていきます。各ステージのスタートは「今の状況」を、ゴールは、「ステップで目指す姿」です。
上記の流れを確認するワークシート！
単元や題材を構想するワークシート！
小学校版ステップはこちら！
＊QRコードは（株）デンソーウェーブの登録商標です。
ステージ1
担当教科等の内容について確認していない。
担当教科等の単元や題材で取扱う内容（教材・教具、学習テーマや学習活動等）について確認する。
他教科等の単元や題材で取扱う内容（教材・教具、学習テーマや学習活動等）について確認する。
教科等間の内容相互の関連について考える。
担当教科等と他教科等のつながりそうな部分を知っている。
ステージ2
担当教科等と他教科等の内容でつながりそうな部分を知っている。
いつ、どの単元・題材で、どのような指導で取り組むか考える。
教科等横断を意識して、授業を行う。
生徒の姿から内容の関連について成果や課題を振り返る。
事後や次年度に生かせるように改善案をつくり、実施する。
担当教科等と他教科等の内容のつながりを理解している。
ステージ3
担当教科等と他教科等の内容のつながりを理解している。
担当教科等で育成する資質・能力（身に付けた力・身に付けたい力）について確認する。
他教科等で育成する資質・能力（身に付けた力・身に付けたい力）について確認する。
教科等間の指導内容相互の関連や資質・能力（身に付けた力）の活用について考える。
いつ、どの単元・題材で、どのような指導で取り組むか考える。
教科等横断を意識して、（身に付けたい力を育成する）授業を行う。
・他教科等で身に付けた力を担当教科で活用する授業
・担当教科等で身に付けた力を他教科で活用できるようにする授業
生徒の姿から資質・能力（身に付けた力）の活用について成果や課題を振り返る。
事後や次年度に生かせるように改善案をつくり、実施する。
担当教科等と他教科等の資質・能力のつながりを理解している。
ステージ4
担当教科等と他教科等の資質・能力のつながりを理解している。
学校で育成を目指す資質・能力と担当教科等で育成する資質・能力（身に付けた力・身に付けたい力）との関連について確認する。
いつ、どの単元・題材で、どのような指導で取り組むか考える。
教科等横断を意識して、授業を行う。
生徒の姿から資質・能力の関連について成果や課題を振り返る。
事後や次年度に生かせるように改善案をつくり、実施する。
学校で育成を目指す資質・能力と担当教科等の資質・能力とのつながりを理解している。
「教科等横断的な学び」への意識の深まり

【引用文献】
・「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）　令和３年１月26日　中央教育審議会
・幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）　平成28年12月21日　中央教育審議会
・中学校学習指導要領（平成29年3月告示）解説　総則編
・「しまね魅力化ビジョン」（令和2年3月策定）
【参考文献】
・小学校学習指導要領（平成29年3月告示）
・小学校学習指導要領（平成29年3月告示）解説　総則編
・特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（平成29年4月告示）
・高等学校学習指導要領（平成30年3月告示）
・特別支援学校高等学部学習指導要領（平成31年2月告示）
・「カリキュラムマネジメント・ハンドブック」ぎょうせい2016年